

# 名主の経済事情と金融

高山慶子\*

はじめに

1. 専業の名主役
2. 江戸の金融業
3. 馬込勘解由の金融
4. 名主金融の事例
  - (1) 本材木町名主の石之助
  - (2) 本所林町二丁目名主の弥右衛門
  - (3) 赤坂一ツ木町名主の八郎左衛門

おわりに

キーワード 役料 拝領町屋敷 仕切地 頼母子講

## はじめに

18世紀中頃以降の江戸には1,600～1,700町に250名前後の名主が存在した。この頃の名主は他の生業を営むことのない専業の名主で、主な収入は、それぞれの名主が支配する町が負担する役料であったとされる。<sup>1)</sup>役料の金額は名主の支配地域や支配町数によって異なるが、江戸で最も高額<sup>2)</sup>の役料を得ていたのは大伝馬町名主の馬込勘解由で、弘化2年(1845)の役料は年間212両余であった。馬込勘解由は宇都宮藩戸田家に元利合わせて8万両を超える多額の金銭を融通していたが、役料をはるかに上回る規模<sup>3)</sup>の貸金の元手は、支配町内の豪商から調達(借金)したものであったことも判明している。<sup>4)</sup>本稿は、この馬込勘解由の金融についてさらなる分析を行うとともに、馬込勘解由以外の事例を検討することで、江戸の名主による金融のあり方を明らかにしようとするものである。以下では、名主の経済事情も考慮に入れながら、名主と金融の関係を検討する。

---

\* 宇都宮大学教育学部准教授、元東京都江戸東京博物館専門研究員

## 1. 専業の名主役

享保7年（1722）、江戸の町奉行所は、現職の名主が死去するか名主役を返上した後は新たな名主を置かないとする名主制度の改革を提案した。この提案は「町中名主人数多く、不埒成も有之、町入用多相掛り候ニ付」<sup>5)</sup>とあるように、名主を削減・廃止することで、各町が負担する町入用の節減を意図したものであるが、これを受けた町年寄の奈良屋市右衛門は、名主の実情を町奉行に説明して制度の現状維持を求めた。このときの説明が、当時の名主のあり方を述べた史料としてよく知られているが、以下ではその史料の一部を示す。

町中名主共之内、草分名主と申、古来より代々名主役相務、忤江跡役段々被仰付候類余程有之、右ニ不限、名主役一通仕罷有候者数多有之、老年ニ罷成候得ハ町人共と相談之上、親ハ役儀差上、忤又ハ親類等養子ニ仕、其者名主ニ仕度段町人共相願候得ハ、被伺上ケ候上、願之通只今迄被仰付、忤ニ養育を請罷有候所、一代切ニ而跡名主不被仰付候得ハ、外ニ商売も無之候故、病身老年ニ及申候而ハ、親妻子等迄及難儀候程之者も可有之哉、其上老年之後、忤ニも養育を請為可申、名主役相勤候内、御用筋情ニ入相勤候者共ニ一代切ニ被仰付候而ハ、多年勤勞仕候甲斐も無之、迷惑可仕儀、且又其者平生働も有之、御用筋大切ニ相勤候者ニ有之候得ハ、支配多罷成候而も可然候得共、左様ニも無之者共支配多罷成候而ハ、御用之儀不手廻ニ相見候も粗有之、尤名主金は隣町名主之支配ニ相付候而も、差而多分之違ニも有之間敷儀ニ候間、自今名主相果候歟、老年病身ニ罷成、名主役差上候歟之類、忤又ハ養子仕候而、名主役町人一同ニ相願候ハ、只今迄之通被仰付、新規ニ常之町人を名主ニ仕候儀ハ、自今不被仰付候様相成候ハ、名主人数連々ニハ減少も可仕趣〔奈良屋市右衛門が町奉行所に（引用者注）被申上候（後略）

冒頭から見ていくと、名主には、古くから親から子へ代々で世襲することが認められている草分名主と、現職の名主が老齢になると支配町内の町人と相談して名主役を返上し、その名主の息子あるいは養子を後任の名主にすることを願い出るという手続きを要する名主が存在したことが知られる。草分名主とは異なる後者の名主も実質的には世襲であるから、江戸の名主は享保7年頃には特定の家の者がつとめるようになっていたといえる。このような状況下で名主制度の改革が行われ、名主役の世襲が認められなくなると、「一代切ニ而跡名主不被仰付候得ハ、外ニ商売も無之候故、病身老年ニ及申候而ハ、親妻子等迄及難儀候」とあるように、ほかに商売を営んでいない名主は家族ともども難儀に及ぶと述べられている。この記述から、当時の名主が専業であったことが知られるのである。<sup>6)</sup>天保14年（1843）には、大坂町奉行からの「名主役之儀、総而無商売ニ有之候哉、又は町儀取締等ニ不差障産業相営候儀は、勝手次第之事ニ候哉」という問い合わせに、江戸の町奉行が「御書面名主之儀、町役之外産業致し候儀無之候事」<sup>7)</sup>と答えており、江戸の名主が専業であったことは明らかであろう。

享保7年の史料に戻ると、「尤名主金は隣町名主之支配ニ相付候而も、差而多分之違ニも有之間敷儀ニ候」と記されている点が注目される。この名主制度改革は、無駄な経費を削減するという目的で提案

されたものであるが、町年寄の奈良屋はそれに対して、名主の人数を減らして名主不在となった町を隣町の名主が支配することになっても、町が負担する「名主金」の金額はたいして変わらないであろうと述べている。この「名主金」は名主役料に相当すると考えられ、支配町が名主役料を負担するというあり方は、享保7年頃には成立していたといえる。

この名主役料について、天保13年（1842）11月に、町奉行の鳥居甲斐守は「御当地町々名主共之儀、名主給と唱候而名主暮らし方入用は町々より出金多少有之候得共、都而町内より差出候儀ニ而外宛行は無之」と述べており、<sup>8)</sup>名主たちが「名主給」つまり名主役料で生計を立てていると認識していたことが知られる。町奉行の鳥居は名主役料のことを「名主給」と称しているが、かつて、享保19年（1734）に深川元町名主の八郎右衛門は、「拙者共町内より請納仕候は役金と名付請来申候」として、「召抱町番人亦是家来江遣候身之代金」と同様の「給金給分」とは異なる、「殊ニ役金と申候而給金と申は少之名目違候事ニ御座候得共、町内ニ抱置候もの同前ニ町々ニ而風説仕候得は、御下知ヲ以取計候儀万事届兼迷惑仕候」、「御公儀様被仰付置候名主共ヲ自分抱置候様給金取候杯不届ニ候、町方在方共名主支配より請候は役金と申儀ニ而給金とは申間鋪儀ニ候、尤從御公儀様被仰付相勤候得は役人之事ニ候」と述べており、名主が支配町内から受け取る金銭は「給金」ではなく「役金」であることを強調している。<sup>9)</sup>また、天保13年に鈴木町名主の源七が提出した書付には、「人を治るものハ人ニ養ハる、人ニ治めらるゝものハ人を養ふ、衣食住役料を以程能活計候ハ、安穩之処」とも記されており、自分たちは町の人びとを治める立場にあるから、治められている町の人びとから役料を受け取る、という名主の認識が示されている。<sup>10)</sup>役料を収入とすることは、町を治める者としての名主の身分的な意識を支えていたと考えられる。

## 2. 江戸の金融業

ところで本稿では、名主の金融について検討を行うが、前節でみた通り他の生業を営まないとされる専業の名主が金融活動を行うことは矛盾しないのであろうか。この点について、本節では分析の前提として私見を述べておく。

江戸の代表的な金融業者としては、巨額の富を築いた両替商や札差が想起される。<sup>11)</sup>両替商はその名の通り金と銀あるいは金銀と銭の両替を本来の業務としており、三貨制度という複雑な貨幣体系下にある近世社会に特有の業種である。<sup>12)</sup>一方の札差は、旗本・御家人に支給される蔵米の受取と売却の代行を行う者であり、武士の収入が米で支給されることによって生じた職種である。両者とも金融（金貸し）によって多大な利益を得たが、この金貸しは余業であって、本来の業務は上記の両替や蔵米受取・売却の代行を通して手数料収入を得ることである。

また江戸時代には、地代店賃収入や金利収入、つまり不動産業や金融業で裕福に暮らす、仕舞屋（しもたや・しもたや）と呼ばれる町人が存在したが、彼らは「商ひせざる町人をしもたやといふ」と<sup>13)</sup>あるように、商いを営んでいないとされる。

以上の点を考え合わせると、江戸時代に「商ひ」「商売」「産業」などというときには、金融（金貸し）は含まれていないと解釈できる。つまり江戸の金融（金貸し）は、それ単独では一つの職種・生業とし

ては位置付けられておらず、本業の合間に営まれる余業として展開したと理解される。よって、名主は専業で他の商いや産業を営まないということと、名主が（余業として）金融活動を行うことは、矛盾しないと考える。

### 3. 馬込勘解由の金融

大伝馬町名主の馬込勘解由は、宇都宮藩戸田家に元利合わせて8万両を超える巨額の金銭を融通したが、他にも縁戚関係にあった奥殿藩松平家や、馬込勘解由が勘定奉行の内藤矩佳の近習役をつとめていた頃に内藤の勝手用人であった吉永清助など、知己の者に金銭を貸したことが明らかになっている。<sup>14)</sup>これらは馬込家文書（東京都江戸東京博物館所蔵）の分析に基づくものであり、既に「馬込勘解由宛ての借用証文」として一覧表にまとめているが、表1はその後新たに確認された借用証文の追加事例、表2は貸借ではなく金銭恵与の事例をまとめたものである。<sup>15)</sup>

表1の3・4・7は宇都宮藩関係の金銭貸借であり、馬込家の金融活動に占める宇都宮藩の比重の大きさを改めて確認できるが、ここではそれ以外の事例として、表1と表2の両方に名前がみられる河内屋要助（要介）に注目する。河内屋要助は、嘉永3年（1850）11月に馬込勘解由から13両を年利12%で借用したことが判明しているが、<sup>17)</sup>表1においても嘉永5年（1852）7月2日に3両を借りており、表2からは寅年（安政元年〔1854〕か）3月26日に20両、慶応元年（1865）5月には60両の恵与を受けたことも知られる。この河内屋要助について、慶応元年5月の証文には以下の通り記されている。<sup>18)</sup>

表1 大伝馬町名主馬込家宛ての借用証文（追加）

	表題（借金理由）	年 代	借用人	宛 名	金 額	利 率	資料番号
1	一札之事(家業躰差支・借金返済金調達方差詰)	嘉永5.7.2 (1852)	河内屋要助	—	3両	—	09000481
2	借用申金子之事（無余儀入用筋）	嘉永7.4.- (1854)	常照院隠居	馬込勘ケ由	15両	—	09000482
3	借用申金子之事（今般要用）	慶応3.8.- (1867)	鳥居小八郎	馬込勘ケ由	20両	無利足	09000689
4	証文之事（一時不行届）	明治2.12.- (1869)	宇都宮藩會計森安七平、同矢嶋弥六	馬込勘解由	15,000両	100両につき 75匁	09000690
5	一札之事（急場入用）	明治4.12.- (1871)	横山町式丁目石井小兵衛、請人秋山孝次郎	大伝馬町様御奥	50両	—	09000489
6	拝借証文之事（無余儀商用）	明治7.4.23 (1874)	野田善吉	馬込	20円	—	09000490
7	証（一）	戊（明治7カ）.4.- (1874カ)	恒川六慶	馬込惟長	25円	—	09000747
8	借用申金子之事（無扨要用）	明治8.7.23 (1875)	第一大区五小区本両替丁乙十三番地片沼均	馬込惟長	50円	—	09000491

出典：東京都江戸東京博物館所蔵、大伝馬町名主馬込家文書

表2 大伝馬町名主馬込家による金銭恵与

表題（理由）	年 代	借用人	宛 名	金 額	資料番号
1 一札之事（伯母親子難渋）	嘉永6.11.- (1853)	敷益次郎内飯田元治	馬込勘ケ由	3両	99200599
2 覚(蔵田庄助江相渡)	寅(安政元カ).3.26 (1854カ)	河内屋要介	馬込	20両	09000486
3 一札之事（入用相嵩）	慶応元.5.- (1865)	要助改河内屋市兵衛、 取扱中村伊之助	馬込勘解由	60両	09000485
4 差上申一札之事（家守退役 にて新規家業元手）	明治2.5.- (1869)	浅草田町家和兵衛ほか4 名	馬込勘解由	50両	09000487

出典：東京都江戸東京博物館所蔵、大伝馬町名主馬込家文書

我等儀吉永清助旧来懇意いたし、右手続ニ而貴殿御縁談御セ話致、其後物入打続度々借入金御頼申上候義ニ御座候処、昨年中入用相嵩、金子御融通相願、右ニ付中村伊之助殿取扱を以、今般金六拾両御恵被下、千万忝奉存候、是迄御引合も御座候ニ付、向後之儀ハ何様之儀御座候とも金銀之儀ハ勿論、御迷惑之儀一切申入間敷候、為後日一札入置候処、依而如件

慶応元丑年五月

要助改 河内屋市兵衛<sup>㊤</sup>

取扱 中村伊之助<sup>㊤</sup>

馬込勘解由殿

冒頭の吉永清助とは既述の通り馬込勘解由の知己の者で、馬込勘解由が勘定奉行内藤の近習役であった頃に「私義〔馬込勘解由〕年若ニ付、外近習并ニ致置候而は身持も自然相崩候哉ニ而、隼人正〔内藤矩佳〕より申付ニ而、清助宅ニ而喰事致、衣類同人方江差置、同居は不致候得共、足懸凡三ヶ年程之間、世話相成<sup>19)</sup>とある通り、3年間ほど衣食の世話になった者である。河内屋要助はその吉永清助と懇意の者で、馬込勘解由の縁談の世話をしたとある。河内屋要助も馬込勘解由の知己であったことが知られ、その伝手を頼って金を借り、さらには返済不要の金銭を恵与された。

嘉永6年（1853）11月に馬込勘解由から3両を恵与された飯田元治についても、証文には以下の記述を確認できる。<sup>20)</sup>

#### 一、金三両也

右は伯母親子之者難渋御歎願申入候ニ付、御恵被下、難有奉存候、尤高井家之条ニ付而は、是迄莫太之御迷惑相掛候段、兼而承知罷在候処、尚又今般書面之金子御恵被下、重々御厚情之至於拙者も不浅奉存候、勿論親子之者身分拙者引取罷在候義ニ付、以後如何様之義御座候共、引請取計、少も御迷惑掛不申候、依之一札差出申処如件

飯田元治は伯母親子が難渋しているとして馬込勘解由から3両の恵与を受けたが、この飯田も吉永清助が関係した「高井家之条」について馬込家に迷惑を掛けたと述べており、吉永清助の知己であったと考えられる。<sup>21)</sup>



以上の通り、馬込勘解由が金銭を貸した（あるいは恵与した）相手の中で、身元が判明する者は、これまで明らかになっていた、馬込家が財務を取り仕切る宇都宮藩戸田家、縁戚関係にある奥殿藩松平家、勘定奉行内藤の下で世話になった吉永清助に続き、河内屋要助も馬込家の縁談を世話する間柄であったことが判明した。限られた事例ではあるが、判明する貸付相手がいずれも馬込家の知己であるということは、馬込勘解由は不特定多数を相手に手広く金貸しを行ったというよりは、知己の者に対して金銭を融通したと解釈する方が妥当であると考ええる。

馬込勘解由は江戸の名主の中では最高額の年間212両余の役料を得ていたが、名主の役料については、町入用負担額の多寡による場所柄上・中・下（負担が多い順）のうち、馬込勘解由が住む場所柄上の地域では、職務を果たし生活を維持できる安定的役料を60両とみなす考え方が<sup>22)</sup>ある。これに従うならば、馬込勘解由は生活を維持するのに十分な役料を得ており、生活のために金融に手を出したとは考え難い。その一方で馬込勘解由は、近世後期には自身が住む場所を除き江戸で町屋敷を所持・集積した形跡はなく、豪商ほどの財力を有したわけではなかったが、<sup>23)</sup>道中伝馬役の多大な負担を補填するために幕府からの拝借金を運用したり、<sup>24)</sup>支配町の豪商から低利で金銭を借用するなど、<sup>25)</sup>名主あるいは道中伝馬役という立場にあることで、多額の金銭が馬込勘解由のもとに入ることも判明している。これらの点をふまえると、馬込勘解由の知己の者たちは、名主あるいは道中伝馬役として金銭を調達できる馬込家を頼って借金をするようになり、馬込勘解由は知己である彼らのために金銭を融通したと考えられる。

#### 4. 名主金融の事例

馬込勘解由以外で金融活動を行った江戸の名主としては、本材木町名主の石之助、本所林町二丁目名主の弥右衛門、赤坂一ツ木町名主の八郎左衛門という3名が知られている。<sup>26)</sup>彼らは、嘉永6年（1853）に「役儀勤向ハ等閑ニ而、高利之金子口々貸付、右を渡世同様ニいたし罷在候」とあるように、名主の職務を等閑にして高利の貸付を本業のように展開したことを町奉行所に咎められたのである。<sup>27)</sup>以下では彼らの金融の実態をみていく。

##### （1）本材木町名主の石之助

石之助は生活を十分に維持できるとされる60両以上の役料（63両1分）を得ていたが、<sup>28)</sup>この石之助の金融の元手金について、五番組と六番組（名主組合、石之助は五番組所属）の世話懸・取締懸の名主が作成した調書（「密々申上候書付」）には以下の通り記されている。

一、石之助貸出金之儀は、同人妹、

金座役人

三宅亀一郎養母

も　と

此もの所持金重二而、前書之外同様之振合に而、貸出金数口有之、勿論家質金も少しハ貸付有之、右何レも貸渡方・返金取立方とも、万端石之助取扱、当時貸出有之当座貸并家質金共、惣鉢束ね凡金四千両前後程も有之由風聞二而、右之内三千両余ももと所持金之様子ニ御座候（後略）

石之助の貸金は4,000両前後に達したが、そのうちの3,000両は石之助の妹である金座役人三宅亀一郎の養母もとの所持金であったことが知られる。この調書の下札には「本文貸出金惣高之義、所々より差加江金も相応ニ有之由ニ付、入混、全石之助自金何程と申当睨と見込兼候」と、石之助本人が出した金額は不明とあるが、五番組と十六番組（十六番組は後述の本所林町二丁目名主弥右衛門の所属組合）の市中取締懸名主と世話懸名主の上申書には「惣鉢貸付金高四千両程も可有之、此内三千両ハもと之金子、千両程ハ石之助所持金ニ可有之風聞ニ御座候」ともあり、貸付の元手金に石之助の所持金も含まれていたことは間違いのないであろう。石之助の貸金は、主に妹と自分の手元にある所持金、および両者以外の者から差し加えられた金銭を運用して、利殖を図ったものであることが知られる。

五番組

本材木町五丁目

同 六丁目

同 七丁目

壱ヶ年役料

正木町

金六拾三両壱歩

名主 石之助

丑五十五歳

世話懸 人別掛 米方懸 非常取締懸

右ものハ文化二丑年二月中名主役被仰付候得共、幼年ニ付後見之もの相勤、同十二亥年中より直勤見習、同十四丑年八月中直勤被仰付、当年迄見習とも三拾九ヶ年相勤候処、生質吝嗇ニ而、其身所持金并親類金座附役人三宅亀一郎養母もと所持金貸付方を内実引受罷在候間、其身下代并町内抱書役之内、

本材木町五丁目

家主 吉兵衛

同町抱書役

啓 蔵

正木町同

新 助

此もの共石之助貸金取扱候由、右貸先口々探方突留候分、別紙之口数ニ而、此外ニも口々有之風聞ニ候得共（後略）

これは五番組と十六番組の市中取締懸名主と世話懸名主の上申書であるが、石之助は吝嗇であると報告されている。世話懸をはじめとしてさまざまな掛役をつとめているが、「石之助儀ハ、一鉢町役勤方

表3 石之助の貸金

証文年代		元金	借主		証文宛名
1	嘉永3年(1850)8月	100両	伊勢屋喜兵衛	神田鍛冶町式丁目吉左衛門地借	佐太郎
			坂倉屋与惣右衛門	浅草福富町式丁目	
2	嘉永4年(1851)10月	5両	儀助	南靱町弥平次店	石之助
3	嘉永5年(1852)7月	10両	忠助	南伝馬町壺丁目五兵衛店	吉兵衛
4	弘化2年(1845)9月	15両	正蔵	白魚屋鋪家主	石之助→吉兵衛
5	去ル已(弘化2年[1845]か)3月	10両	平助	南伝馬町三丁目家主八兵衛倅	石之助→佐太郎→吉兵衛
6	年月不明	15両	仁助	本材木町六丁目茂兵衛店	

出典：「密々申上候書付（五番組六番組世話懸取締懸調書）」（『大日本近世史料 市中取締類集』8、396～400頁）

ハ等閑ニ候へ共、組合内ニ古ク相勤候もの追々代替故、当時書面之通掛役も被仰付候得共、御用弁ニハ相成兼、兎角自儘成取計振有之」とも記されており、掛役は老年の名主が引退して代替わりをした折にまわってきたものにすぎず、勤めぶりは等閑・自儘と評判が悪い。

石之助と妹の所持金の貸付は、自身の下で働く下代と支配町内の書役が行っていたとあり、家主の吉兵衛と書役の啓蔵・新助の3名があげられているが、五番組と六番組の世話懸・取締懸の名主による調書には、彼らのほかに質屋を営む（「質渡世ニ而角竹と申候」）本材木町五丁目の家持佐太郎が、石之助の金融に関与したことが記されている。表3は、このときに判明した限りでの石之助の貸金をまとめたものであるが、1と5の貸金で佐太郎が証文の宛名になっていることを確認できる。石之助の金融には支配町内の人びとがかかわっていたことが知られる。

この貸金の貸付相手であるが、6の本材木町六丁目茂兵衛店の仁助が「此もの義ハ大道春渡世ニ而、石之助方江月々飯米春入致居、（中略）月々春賃ニ而返済差引ニ致、勘定仕立候」とある通り石之助方に出入する春米屋であるほかは、石之助との関係を確認できない。1の伊勢屋喜兵衛と坂倉屋与惣右衛門に対する貸金が、「利金貳拾五両ニ付金壺分〔年利12%〕之積ニ候得共、事実ハ貳拾両ニ付壺分〔年利15%〕之利合ニ而、三分之礼金相付、右利・礼金共テン引之由、四ヶ月縛り・おとり候趣」というものであったことをはじめとして、表3の貸付はいずれも、高利、礼金、踊りなどといった不当な仕法で貸金が行われたことが報告されている。つまり石之助の金融は、知己の者に金銭を融通した馬込勘解由とは異なり、自分とは縁のない者を相手に、高い利子や過度な礼金などを要求した貸付であったと指摘できる。客齋で名主としても評判の悪い石之助が、自身の利殖のために書役らも巻き込んで高利の貸付を行ったのである。

## （2）本所林町二丁目名主の弥右衛門

弥右衛門の役料は年間10両1分余と少ないが、本所林町二丁目が属する場所柄下の地域でも名主の安定的役料は20両とされており、弥右衛門は役料のみでは生活に差し支えることになる。この点について、十六番組（名主組合、弥右衛門の所属組合）の世話懸名主が作成した上申書には、以下の通り記されている。



本所林町貳丁目

深川要津寺門前

名主 弥右衛門

右弥右衛門儀、内実高利之金子貸出、専ラ融通致候義ニ付、密々取調可申上御内沙汰ニ付、相探、左ニ申上候

一、同人儀は前書式ヶ町支配致候所、場末少間之町々故、役料も至而少分ニ付、畢竟役料而已ニ而は暮兼候哉ニ而、所持之金子先年より貸付、利潤を以暮方助成ニ致成罷在候趣之处、追年金子貸出方超過ニ相成、内実は当時業躰之様ニ而、余程手広ニいたし候由（後略）

弥右衛門が名主として支配する町は、町はずれにあり間口も狭く役料が極めて少ない。そのため弥右衛門は役料だけでは生活できず、自身の所持金を貸し付けることで、その利子収入を生計の足しにしていたとある。この記述からは、利殖のために金融を行った本材木町の石之助とは異なり、弥右衛門は生活に困って金融を始めたように見える。しかし実際は事情が少し異なるようで、五番組と十六番組の市中取締懸名主と世話懸名主の上申書には以下の通り記されている。

右弥右衛門先代実父吉右衛門儀ハ支配少分ニ而、壹ヶ年役料至而少高ニ候得共、林町貳丁目は御蔵手代衆拝領町屋鋪故、内実地主衆相對ニ而吉右衛門仕切地ニ致し、右を暮方ニ足合、年来質素ニ相勤、此仕切地徳分貯金六百両程当弥右衛門江相統之為相讓候由、然ル处、当弥右衛門ハ幼年之節、商人共方ニ而生立候間、町役筋之心懸無之、利用而已心懸候故、先年隠遊所本所松井町・同所里俗弁天と唱候八郎兵衛屋鋪・同御旅と唱候深川御船藏前町場所之茶屋共江、親より之讓金を高利ニ貸付、利倍いたし、尤貸付方懸引巧者之由、追々家質等も貸付、又ハ諸荷物証拠ニ預り、貸金も致、身上持立候に付、當時は家質貸付候地面流地弥右衛門所持町屋鋪拾ヶ所余有之由（後略）

弥右衛門の実父である先代の名主の吉右衛門は、自身の支配町である本所林町二丁目が御蔵手代衆の拝領町屋敷であったので、同所の町用などを取りしきることを地主の御蔵手代衆と相対で取り決め、その仕切賃を収入として得ていた。吉右衛門はそれを生計の足しにするだけではなく、質素な生活を送ることで600両の貯金をつくり、この600両を息子の弥右衛門に譲り渡した。しかし譲り受けた弥右衛門は名主としての自覚がなく、600両を運用して利殖することのみを考え、当初は岡場所の本所松井町・八郎兵衛屋敷・深川御船藏前町の茶屋などに高利で貸し付けたとある。弥右衛門は金融の駆け引きに長けており、家質（町屋敷を担保とする貸付）をはじめ質物をとる貸金も行った結果、暮らし向きがよくなり、當時は質流れとなった町屋敷10ヶ所余を所持するまでになったという。

たしかに先代吉右衛門と弥右衛門の役料は少なく、生活は楽ではなかったと思われるが、吉右衛門が生計を支えるためにとった手段は拝領町屋敷の差配であり、それで貯めた600両を息子の弥右衛門が金融の元手にしたのである。貯金の運用には生計の維持という目的もあったであろうが、「追々貯金も出来候哉ニ而、當時所持地面等も拾ヶ所余も有之趣、其外家質并貸金等手広之由、近来別而名主役之方自と疎略ニ成行候哉、代為任之様子ニ相聞申候」とあるように、名主としての仕事を等閑にして金融を手

広く行ったとなると、生活を維持するためという範囲を超えている。つまり弥右衛門の金融も、まとまった金銭を元手に利殖を行うという性格を帯びていたと指摘できる。

なお、弥右衛門には、「弥右衛門第二而新和泉町住居大坂屋弥兵衛と申質両替并古着渡世致、此もの忤ニ盲目有之候処、弥右衛門世話をして以勾当ニ致、当時岡木勾当と申、馬喰町式丁目ニ住居罷在、右官金之名目を以、内実弥右衛門方より高利ニ貸出、此分は重ニ新吉原町遊女屋共并茶屋共江貸付候」とある通り、質両替と古着屋を営む大坂屋弥兵衛という弟がいたことが知られる。弥右衛門には金融に精通した者が身内に存在したことを指摘できる。

### （3）赤坂一ツ木町名主の八郎左衛門

赤坂一ツ木町は場所柄中の地域に属するが、この地域の安定的役料は40両であり、八郎左衛門はそれとほぼ同等の37両余の役料を得ていた。<sup>30)</sup> 八郎左衛門については、世話掛名主の上申書に以下の通り記されている。

右八郎左衛門儀ハ、四谷塩町三丁目家持市郎兵衛忤ニ而、（中略）四代以前八郎左衛門隠居いたし居候ニ付、同人江養子相成、同年〔文政12年（1829）〕五月中跡名主役被仰付相勤罷在、其後兩三ヶ年も過キ、養父母共病死いたし、当八郎左衛門儀ハ才氣有之ものニ而、先年ハ遊所等江も罷越候得共、当時右様之儀無御座、勤向も其頃より格別不勤と申儀も無之、近頃迎も等閑候と申程之儀ハ無之候得共、相弛ミ候哉、酒ハ好ミ給候様子無御座、茶湯稽古いたし候得とも、暮向儉約之趣、尤六七ヶ年以前より少々宛貸出金いたし、此程ハ手広之由ニ候得共、員数等碇と相分兼、証文名前之儀ハ八郎左衛門娘しま并手代藤七・妻たよ・娘かね等名宛ニ而、利足之儀ハ、壹ヶ月金貳拾五兩ニ付壹歩之割合、為礼金貸金高五歩位を受取、期月五六ヶ月目位之取極ニ而、返金相成兼候分ハ切替相改、其度々礼金并其月之利足相踊受取候由（後略）

八郎左衛門は四谷塩町三丁目の家持市郎兵衛の息子で、4代前の名主八郎左衛門の養子であったことが知られる。上申書の書き振りで、才氣はあるが取り立てて良くも悪くもないといった人物のようである。6～7年ほど前から金銭の貸し付けをはじめ、近年は金融を手広く行っていたという。この金融を始めた経緯について、同じ上申書では以下のように報告されている。

一、金子繰出方之儀ハ、七八ヶ年以前迄借財有之、不手廻ニ付、麴町平河町壹丁目家持喜谷屋市郎右衛門とハ兼而懇意之手続より、同人を相頼、金百貳三拾兩取之頼母子講取立、右金子ハ満会迄金三四拾兩壹歩位之利分割合を以同人江相預、右利分ニ而無尽懸続候仕法ニ而、出来極之通り金子不残同人江相預、其後八郎左衛門義追々繰出、前書割合ニ而所々江貸出、取立方嚴重之様子ニ而、期月日限過候分、代之もの催促ニ相廻、礼金利違之金子ハ自分所得ニいたし候由ニ候へ共、都度々前書市郎右衛門方江勘定相立候哉ニ而、右預り金其外当時同人所持金貳三百兩程も出金相成候哉、多分之儀は有之間舗由、右躰取立方宜、利倍いたし候ニ付、八郎左衛門姉婿四谷伝馬町式丁目家持外酒渡世三河屋安右衛門儀も金三四百兩程差出有之由、然ル処、市郎右衛門とハ右様之儀ニ付、格別

懇意致候ニ付、同人世話いたし候山下御門辺御屋鋪ニ而取立相成候金千兩取之無尽積金講江、初会懸金ハ市郎右衛門差出加入為致、月々懸金ハ八郎左衛門手元より懸続候処、去々亥年冬頃ニ会目位ニ而同人中り鬩相成、金千兩手取候由、右等取交貸出可有之、員数等睨と相分兼候へ共、赤坂・麴町・四谷・芝辺町方之もの江重ニ貸出候由ニ而、凡金三千兩程ニ相成居候趣ニ相聞申候

八郎左衛門は7～8年前まで借財があり、その返済に困っていたので、懇意にしていた麴町平河町一丁目の家持である喜谷屋市郎右衛門を頼り120～130兩の頼母子講を組んだ。講の給付金は年利7.5～10%で満会まで市郎右衛門に預け、その預金の利子で講の掛け金を出すというものであった。やがて八郎左衛門は預金から金銭を引き出し、それを元手に金貸しを始めたという。当初の金融の規模はそれほど多額ではなかったが、八郎左衛門の貸金は取り立ても良好で利殖に成功していたので、姉婿の四谷伝馬町二丁目の家持で升酒屋の三河屋安右衛門が300～400兩ほどを八郎左衛門に差し出した。その後、市郎右衛門が世話する1,000兩の無尽に加入したところ、八郎左衛門が当たり鬩となって1,000兩を手にしており、これも元手にして、赤坂・麴町・四谷・芝あたりの町の人びとを相手に、約3,000兩ほどの貸金を行っていたという。

このように八郎左衛門は、当初は借財の返済に困って知己の市郎右衛門を頼り、同人の世話による頼母子講を通して一定の金銭を得られると、それを元手に金融を始め、やがてその金融が手広く行われるようになったことが知られる。

以上の（1）から（3）の3件の事例にみられる共通点は、いずれも潤沢な元手金があったことである。本材木町名主の石之助は金座役人の家に嫁した妹の所持金3,000兩、本所林町二丁目名主の弥右衛門は父から相続した600兩、赤坂一ツ木町名主の八郎左衛門は姉婿の差し加え金300～400兩や頼母子講の給付金1,000兩などを、それぞれ貸金の元手に充てている。また、彼らが金融を行うに際しては、石之助には妹の養子にあたる金座役人や支配町内の質屋、弥右衛門には質両替の弟、八郎左衛門には講の世話をする知己の喜谷屋市郎右衛門という、金融に精通した者が身近に存在したことも、共通点としてあげられる。名主が金融を行うためには、一定の元手金と金融の知識が必要であったと考えられるが、彼らはその両方をみだして金融活動を展開したのである。

なお、これらの事例はいずれも過度な利殖を行ったことを咎められたものであるが、八郎左衛門の一件について小口世話懸名主と十五番組世話懸名主が八郎左衛門に対する寛大な処分を求めた願書には、以下の通り記されている。

（前略）一躰名主共之内前々ハ余業いたし候ものも有之候得共、金銀貸ニ証文利足之外、礼金、又ハ証文書替・月数増等之仕様、御沙汰奉受候而ハ、其身蒙御仕置候儀ハ勿論、旧来相続仕候町役勤方及退転、何共重々歎敷次第奉恐入候間、可相成御儀ニ御座候ハ、当人退役為仕、是迄貸付候金子取立方全御触之通利足壹割之外余分之徳用受取間鋪旨、下々ニ而厳敷為相改可申候間、御慈悲之御沙汰、私共限極密ニ奉歎願候

名主の中には、以前は「余業」を行う者も存在したとあるが、そのあとに、金銀の貸付に際して証文に記された利息以外の礼金などをとる違法な手段をとれば、処罰を受けるのは当然であると続くことから、ここでの「余業」は金融を指すと考えられる。ここからは、金融を余業として行う名主が八郎左衛門のほかにも存在したことを指摘できる。そして、八郎左衛門がこれまでに貸し付けた金銭の取り立てに際しては、公定の1割の利息以外の余計な得金は取らないとして、寛大な処置を求めている。八郎左衛門を含む3名の名主は、金融活動を行ったこと自体を咎められたというよりは、名主役を等閑にして過度な利殖に走ったことを問題視されたということも考慮に入れると、過度な利殖に走らず公定の利率に基づくのであれば、名主による金融も容認されていたと考えられる。<sup>31)</sup>

## おわりに

これまでの分析を通して、大伝馬町名主の馬込勘解由の金融は豊富な集金力を背景に知己の人たちに金銭を融通したもの、本材木町名主の石之助・本所林町二丁目名主の弥右衛門・赤坂一ツ木町名主の八郎左衛門の金融は、まとまった元手金を得て過度な利殖に走ったものであったことが判明し、名主による金融のあり方も様ではなかったと指摘できる。本稿で取り上げた名主以外でも、南伝馬町二丁目名主の高野新右衛門が家質をとって借金の肩替わりをしたり、<sup>32)</sup>深川熊井町名主の熊井理左衛門が宝暦11年(1761)に旗本に250両を貸すなど、<sup>33)</sup>金貸しを行った事例が散見される。また、深川相川町名主の相川新兵衛が両替商や札差と縁戚・交際関係を形成したり、<sup>34)</sup>雉子町名主であった斎藤幸成(月岑)の息子幸知(通称喜之助)が明治になって大蔵省貨幣寮の監査役、さらには国立第一銀行行員になるなど、<sup>35)</sup>名主と金融には密接な関係があったことがうかがえる。

但し、金融を行うためには一定の元手金が必要であり、生活に困窮した名主が容易に行えるものではない。馬込勘解由のように、生活を営むのに十分な役料を得られる、経済力を有する豪商から金銭の融通を受けられる、幕府から拝借金を下付されるなどという一定の集金力は、(馬込勘解由ほど突出していなくとも)不可欠であったと思われる。江戸の名主全体の半数は安定的役料を得られなかったとも指摘されており、<sup>36)</sup>多くの名主は役料のみでは生活を維持できなかったと考えられるが、本稿で検討した馬込家以外の事例では、お金に困った名主は拝領町屋敷の差配を行ったり、知己を頼って頼母子講を組むなど、金貸しとは別の手段で金銭を工面しており、金貸しは一定の元手金ができただけに行うことができるものであった。また、過度に利殖を求めた金融は幕府の規制の対象になっており、それほど自由に金融活動を展開できたとも思われない。分析した事例が少ないため今後のさらなる検討を俟たなければならないが、少なくともすべての名主が金融を行うことができたとは考え難い点を指摘しておく。

本稿では主に名主による金融の検討を行ったが、名主の経済事情については多くの課題が残されている。名主には役料以外に、支配町内で町屋敷の売買、家督相続、家守の交代などが行われた際の礼金・祝儀などという収入があったことはよく知られている。<sup>37)</sup>しかし、この類の礼金や祝儀が名主の収入全体のどれくらいを占めるのかは不明であり、<sup>38)</sup>こうした役得以外の収入がどれほどあったのかも明らかになっていない。名主の経済的な側面が明らかになれば、当時の社会における名主のあり方をより深く理



解できるようになると考える。名主の家計簿に類する史料の発見も含めて、今後のさらなる研究の進展を期待したい。

## 註

- 1) 幸田成友「江戸の名主について」（『史学』2-4、1923年、後に「江戸の名主」として『幸田成友著作集』第1巻、中央公論社、1972年に収録）など。役料は各町の地主が負担する町入用から支出された。江戸の町入用については、伊藤好一「江戸町入用の構成」（西山松之助先生古稀記念会編『江戸の民衆と社会』吉川弘文館、1985年）参照。
- 2) 吉原健一郎『江戸の町役人』（吉川弘文館、1980年）。名主の役料を分析した研究に、加藤貴①「寛政期江戸名主の経済状況」（日本史攷究会編『日本史攷究』文献出版、1981年）、同②「名主役料からみた江戸の地域構造」（『歴史地理学』125、1984年）がある。
- 3) 幸田成友「馬込勘解由」（『経済学研究』4、1935年、後に『幸田成友著作集』第2巻、中央公論社、1972年に収録）。
- 4) 高山慶子①「江戸町名主の金融—大伝馬町名主馬込勘解由を事例として—」（『史学』77-2・3、2008年）、同②「大伝馬町の馬込勘解由」（『東京都江戸東京博物館調査報告書第21集 大伝馬町名主の馬込勘解由』2009年）。
- 5) この一件に関する記述・史料引用は、「正宝事録」（『江戸町触集成』第4巻、塙書房、1995年、5799）による。
- 6) なお、塚田孝「吉原—遊女をめぐる人びと—」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅲ人、東京大学出版会、1990年、後に塚田著『身分制社会と市民社会』柏書房、1992年に収録）は、堀で囲われ同職集住がくずれにくい吉原（遊郭）の町々では、18世紀中頃までは遊女屋の経営者が名主をつとめており、名主が専業化するのとは、ほかの町より遅い18世紀中頃以降である点を指摘している。
- 7) 「名主役勤方自身番屋等之儀ニ付調」（『大日本近世史料 市中取締類集』5、東京大学出版会、1965年、299～306頁）。
- 8) 「町々名主共儀ニ付御内慮奉伺候書付」（『大日本近世史料 市中取締類集』5、202～203頁）。
- 9) 「（松嶋町家主藤兵衛深川元町八郎右衛門江悪口一件）」（『重宝録』巻17、東京都版第3、東京都生活文化局広報広聴部情報公開課、2002年、361～365頁）。
- 10) 「取締其外改革筋心付候廉名主共申立候書面」（『大日本近世史料 市中取締類集』1、298頁）。
- 11) 江戸の金融業者としては、これらの他にも質屋をはじめとする庶民金融も存在したが、ここでは省略する。庶民金融の概要については、小野武雄編著『札差と両替』（展望社、1977年）、北原進『江戸の札差』（吉川弘文館、1985年）などを参照。
- 12) 両替商と札差の概略については、小野編著書（前掲11）、北原著書（前掲11）、『国史大辞典』第14巻（吉川弘文館、1993年）「両替」（末岡照啓氏執筆）、同第12巻「札差」（北原進氏執筆）などを参照。
- 13) 『嬉遊笑覧』4（『日本随筆大成』別巻10、吉川弘文館、1979年）。
- 14) 高山①・②論文（前掲4）。
- 15) 高山①・②論文（前掲4）は9920ではじまる8桁の資料番号を有する馬込家文書を分析したもので、これらの古文書は『東京都江戸東京博物館調査報告書第21集 大伝馬町名主の馬込勘解由』（前掲4）に目録・翻刻が掲載されている。この報告書の編集時に行った調査で新たに馬込家文書が確認され、現在は東京都江戸東京博物館の所蔵資料として0900ではじまる8桁の資料番号が付されている。本稿の表1はこの0900ではじまる資料番号の文書から抽出した事例である。この新出資料の一部は同館図書室においてマイクロフィルムで公開されている（本報告書所収の「東京都江戸東京博物館所蔵 江戸の町名主 資料目録」参照）。以下で馬込家文書を引用する際には、資料名と資料番号のみを記



す。

- 16) 3の鳥居小八郎は文久3年（1863）12月に宇都宮藩の家老であったことを確認できる（「借用申金子之事（越前守家中救助につき金500両）」99200611）。7の恒川六慶は、慶応3年（1867）12月に家老であった恒川七右衛門（「借用申金子之事（土佐守先代借用返済残分金62642両）」99200620）、明治3年（1870）12月に宇都宮県権大参事であった恒川（「恒川権大参事」）（「借用申金子之事（会計要用につき金2240両3分）」99200626）と同一人物と比定した。
- 17) 高山①論文（前掲4）。
- 18) 「一札之事（昨年中入用相嵩につき金60両御恵）」09000485。
- 19) 「高井一条手続書」99200597。
- 20) 「一札之事（伯母親子難渋につき金3両御恵）」99200599。
- 21) 吉永清助が関係した高井家の一件については、「高井一条手続書」（前掲19）、および高山①論文（前掲4）参照。
- 22) 加藤①論文（前掲2）。この論文では、名主の安定的役料は、場所柄上が60両、中が40両、下が20両とされている。その史料的根拠はないとされるが、中については、寛政2年（1790）に、芝田町名主の役料46～47両、芝西応寺名主の役料55～56両、三田町名主の役料39両が「相応之上り高」とされていることが指摘されている（「芝田町徳三郎外四人跡名主之儀并町中名主共之儀ニ付奉伺候書付」『大日本近世史料 市中取締類集』5、220～225頁）。また、東京都編『区制沿革』（都史紀要5、1958年、鷹見安二郎氏執筆）には「その当時年額六十兩位は名主としての生活に是非必要だったものと思われる」ともある。これらの根拠に基づく加藤説は一定の妥当性があると考ええる。
- 23) 高山①論文（前掲4）。
- 24) 片倉比佐子『大江戸八百八町と町名主』（吉川弘文館、2009年）。
- 25) 高山①論文（前掲4）。
- 26) 川崎房五郎『大江戸八百八町』（桃源社、1967年）、加藤①論文（前掲2）。
- 27) 以下の史料引用はすべて「本材木町名主石之助外式人如何之風聞有之儀ニ付調」（『大日本近世史料 市中取締類集』8、390～417頁）による。
- 28) 加藤①論文（前掲2）。本材木町は場所柄上の地域に属する。
- 29) 加藤①論文（前掲2）。
- 30) 赤坂一ツ木町名主の八郎左衛門の役料は、「本材木町名主石之助外式人如何之風聞有之儀ニ付調」（前掲27）に記されていないため、弘化2年（1845）5月付けの「町々役料高書上」の金額を記した（『町々役料高書上』坤、東京都、1979年、46～47頁）。安定的役料については、加藤①論文（前掲2）。
- 31) なお、本史料には「前々ハ」（以前は）「余業いたし候ものも有之」とあり、この史料からは、この願書が作成された嘉永6年当時も金融を行う名主が存在したのかどうかは不明としなければならない。しかし少なくとも、名主が金融を余業として行い、それが容認（黙認）された時期があったことは確かであろうと考える。
- 32) 東京都編『元禄の町』（都史紀要28、東京都、1981年、片倉比佐子氏執筆）。
- 33) 高山①論文（前掲4）。本報告書の口絵11参照。
- 34) 高山慶子「江戸町名主の縁戚と交際—深川相川町名主相川家を事例として—」（『日本歴史』754、2011年）。
- 35) 「斎藤市左衛門家系図」（『翟巢通信』創刊号、私家版、2009年）。
- 36) 加藤①論文（前掲2）。
- 37) 幸田論文（前掲1）、吉田伸之「おさめる：行政・自治—近世前期、江戸の名主を例として—」（大谷幸夫・羽田正・

和田清美編『都市のフィロソフィー—都市とは何か、その本質—』こうち書房、2004年）など。

- 38) 吉田論文（前掲37）では、元禄12年（1699）の日本橋通一丁目で町屋敷（間口5間・沽券金高500両）が売買されると名主家に5両2分ほどが入ると試算され、こうした祝儀が支払われる事案が支配町内で発生すると、名主には相当額の収入がもたらされたと指摘されている。しかし、こうした事案がどれほどの頻度で発生し、実際の金額がいくらになったのかは不詳である。